

水草研究会会報

No. 4 June 1981

シャジクモと私 (研究初期の頃の思い出)

加 崎 英 男

(都立大学・牧野標本館)

大学の卒業研究でシャジクモに取組んで以来、とうとう現在までシャジクモとのつき合いが続いてしまった。また、シャジクモを通して他の水草とのつながりも自然にできてしまったように思う。研究初期の頃大きなリュックをかついで湖沼を歩き廻ったことがなつかしく思い出される。このような次第で、水草研究会には同好会発足の頃、原田さんや大滝さんから話をうかがい、ぜひ仲間に入れていただくつもりでいながら、ここ2、3年来の異常な忙しさにことかまけて手続きをさぼってしまい申し訳ない気持ちで一ぱいであった。今回本学大学院の国井君を介して角野さんからのおすすめがあり原稿を引取ったのもこんな背景があったからである。

ところでシャジクモは水草に入るものかどうか、自分でも判っきりとしない。水草の定義によることでもあろうが、少なくとも水生の維管束植物や種子植物を水草とよぶということであれば当然除外されねばならないものとなる。一方水生植物ということであればそのニュアンスからかなり幅ができることになりそうだ。10年近く前、私は雑誌「遺伝」の水生植物特集号に「水生植物の概念」と題して駄文を綴った折にもこんな問題に意識しながらふれた記憶がある。だが、いづれにしても水中における植生の垂直分布を扱う場合には高等植物の分布帯と並んでシャジクモ帯が認められ扱われるのが常識である。こんなことからシャジクモは大型藻類でもあり、一般水草並みの扱いを受けるものという勝手な解釈をお許し願って水草研究紙上への登場を認めていただければ幸いです。

シャジクモ研究の発端 旧制高校時代の生物実験でシャジクモの原形質流動を観察した覚えがある。また、東大植物科に入ってから学生実験の材料としてシャジクモが扱われた。当時本郷の植物教室の温室附近や小石川植物園には屋外の水草用の大型水鉢の中にいわゆるシャジクモ *Chara Braunii* がどこかに必ず顔を出しており、いつでも容易に手に入った。また、植物園では湧水のある池や流れ出す溝の中にカワモズクやシャジクモがあり、面白い植物だとは思いつつもさして珍しいものとも思わなかったし、皆同じ種類のようにも見えた。しかし当時隠花植物の講義を担当されていた本田正次先生の講義で、この植物が藻類の中では異常にレベルの高いものであること、また分類学的に日本では全く手ついていない空白地帯であることなどを聴き、やや関心がわいてきた。丁度そんな折、たまたま目にふれた牧野富太郎先生の、かつて植物研究雑誌にかゝれた一文(植研6:12 "何故ニ我が日本産しゃじくも科植物ノ品種ヲ研究セザル乎")に感銘を受け、いづれにせよ卒業研究で分類学を志していた私は、思い切ってこの処女地に乗出してみようと決意を固めた。牧野先生は当時75才を越えておられたが、なお翌樂として東大に講義に見えていたので、直接御意見をお聞きすることもでき、はげまされもした。

研究開始の頃 こうして昭和14年春分類学の研究室に入り、中井教授指導の下で研究を開始することになった。何しろ誰れも手をつけていない分野の仕事である。

文献もないし、採集も自分の感じだけを頼りに手さぐりに近い状態で始めねばならぬ。どういふ結果になることや見当もつかない状態であった。とにかく文献を集めながら、東京附近の水域に材料を求めることから始めた。

文献は実に寥々たるもので、牧野図鑑にはシャジクモ属 *Chara*、フラスコモ属 *Nitella* それぞれ3種類づつのっていたが、他に日本に関する文献としては、斉田功太郎(明治20年、植維1(2))と日本から送附の材料に関する外国学者の断片的な報告(T. F. Allen: 1893~1898, Bull. Torrey Bot. Club 21, 22, 23, 25, Migula: 1930, Hedwigia 70)のみであった。しかし、幸いにも Migula の大著(1890~1897, Die Characeen, In Rabenhorst, Kryptogamen-Flora 5)が教室の図書室にあったので、借出して765頁の部厚い著書に取組み、車軸藻学の吸収につとめた。

材料の採集に関しては、井ノ頭公園、石神井池、善福寺池など手近な池沼を手当り次第に歩き廻り、柄の先に潮干狩用の熊手を取りつけたものを用意して採集したが、成果は思う程上らなかった。見い出されたものは何れもシャジクモ *Chara Braunii*、カタシャジクモ *C. globularis* ばかりで変化はなかった。ただ後に判った事であるが、井ノ頭から流れ出る神田川の水路に、当時は水草も豊富であったが、未知の種類があり、結実期でなかったので同定できなかつたが、これが後にイノカシラフラスコモ *Nitella inokasiraensis* と名付けた新種であった。この種類は雌雄異株で染色体数も最少($n=6$)であることその他、流水域のものとして特筆すべきものである。今は人家からの汚水が流れ込み見るかげもなくなっている。

こんな折、当時2年上の生態学の宝月欣二先輩が手賀沼を手がけていられることを知り、早速連れて行ってもらい、またボートを利用して舟上から採集する方法などの教示も受けた。採集用いかりは中野治房教授考案のもので鋳物製の重い鉄のいかりに網のはってある頑丈なものである。深度の深い湖水ではこの程度の重さが必要で

あるが手賀沼程度の場合には、持ち運び、取扱いが大変なので後には別の軽便なものを考案し使用するようになった。手賀沼へは何回か通っている中に、いくつかの珍しい種類を採集することができた。何れも本邦新産であり、この中の一つで新種と考えられるフラスコモは中井教授のすすめで先生の主宰する東亜植物図説3(1940)にテガヌマフラスコモ *Nitella fallosa* として発表させてもらった。

手賀沼で力を得て、近くの印旛沼にも足を運び同様成果をのぼすことができうれしかった。こうして湖沼学の知識の必要性を感じ、文献を読み、さらに湖沼学の吉村信吉博士を訪ね直接いろいろ御教示を受けた。先生から中禅寺湖などで採集されたいくつかの標本も頂戴した。

その後いわゆる大型の湖水を歩く様になり、私の学位論文の仕事もこの形でまとめることとなったのもこのような関係からである。同じ頃全く別途に広島でシャジクモの仕事を始められていた今堀宏三氏がいたのは終戦後まで全く知らなかった。この今堀氏が小さい沼や池を中心に仕事を進められたのとは、この点対照的であった。面白いことにはフラスコモ *Nitella* は小さい池沼に多く、シャジクモ系のものは大形の湖水に多いという傾向がある。湖水ばかり歩いていた私が後に幸運にも芦の湖、野尻湖などでホシツリモ *Nitellopsis*、八郎潟でシラタマモ *Lamprothamnium* というシャジクモ系の日本新産属を発見できたのもこのような関係によるものと思う。

私の初期の仕事は戦前一年許りの短い期間のものであったが、多少手直しをした上で先輩連の御好意により、戦地へ出征後植物研究雑誌に4回に亘り掲載してもらった(1941・植物研究雑誌 17: 1, 2, 3, 4)。戦地で送られて来た自分の処女論文を手にした時はさすがにうれしかった。周囲に理解して呉れる人とていない空漠とした軍隊社会の中であつたが、親しい大学出の戦友に事情を話すときから一諸に喜んで呉れ、休日の外出をまって中国街角の居酒屋でチャン酎で乾杯したことが懐しく思い出される。全く明日の命も判らない前線の生活の中で、残し得る自分の足跡を確認できた喜びは格別であつた。